

「家がいいね」 第81号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2011. 2. 5

言の葉

一月もあっという間に過ぎてしまいました。始めの行事も色々あります。歌会始めのお題は、「葉」です。中学の少女の歌が選ばれていました。

「大丈夫」「この言葉だけ言ふきみの

不安を最初にきづいてあげたい

相手の言葉の背後にも向かい合う、素直な気持ちがとてもいい歌ですね。ケアに向かう私達も、この歌をつぶやいてみたいと思います。何年経っても悲嘆がこみ上げる人に、そっと寄り添うためにも、こころのなかに抱き続けたい歌です。

ゴール後の一礼の素晴らしさ

日曜の昼、「ひろしま男子駅伝」の中継をつい最後まで見続けましたが、3位争いの大変な接戦のゴールの後に、すっと後ろ向きになり、来し方の走路に一礼した選手が印象に残りました。彼は三重県のアンカーで区間賞を取った高林祐介さんでした。最下位の



沖縄のアンカーも、同じように一礼をしました。私を感じたのは、走り切った体への感謝、タスキを繋いだ仲間への感謝、大会運営者への感謝、沿道の応援への感謝、それらをこの一礼で見事に表したことです。体力を振り絞って、ゴールした時にガッツポーズなどを素直に表すことも、選手らにとっては自然なことですが、さらに大きなものへの感謝が、このように一瞬に伝わってきて、本当に嬉しく思いました。

高林さんは伊勢市小俣町出身、「地元の少年たちが駅伝を目指すように走りたい」との言葉も思い出しました。将来を託す若者たちが必ずいることを、この一礼に見た想いがします。

苦楽（くるたの）しい

苦しいと楽しいが同居している、不思議な言葉ですが、遠藤周作さんが小説を創る時の心境として述べられたと思います。生きて行く時、正反対の感情を同時に抱えるのは、よくあることです。

しかし、その周作さんが癌で入院治療した時は、苦しいばかりでした。奥さまが遺志を継ぎ「あたたかい医療を実現して」と講演されているのは、苦しい中にも楽しさがある、そんな現場の実現を医療従事者に求められているのだと思います。

縁（えにし）の家でお待ちしています

在宅医療を始めて、9年になろうとしています。最期を自宅で迎えた人も、迎えられなかった人もいます。見送った人の中に、どんな気持ちか、渦巻いているか、今も私たちは気がかりに思っています。機会を作りお話したく思います。そのための企画を準備中です。場所はクリニック隣の「こ」。よろしければ、お立ち寄り、ご相談ください。ピンポン。



私たちがお話を聴きします



大西です。

大島居です。



倉野です。

羽根です。



西岡です。



遠藤です。



自宅での人生を
最期まで支援します

〒516-0805
三重県伊勢市御園町高向 927
電話 0596-20-8104
ファクス 0596-20-8105
mail homecare@kr.tcp-ip.or.jp
<http://www.tcp-ip.or.jp/~takuro>